高校までの思い出といま

平口　哲夫

昭和二〇年（一九四五）生まれの私が四七年後、大学一年生に第二次世界大戦の話しをするのは、ちょうど明治元年（一八六八）生まれの人が私の両親の世代に幕末・明治維新の話しをするようなもの。　母の実家が敦賀にあり、そこで生まれた私は、生後百日目に空襲の洗礼を受けるはめになった。当時父は金沢に単身赴任、母は兄や姉共々、祖母の守る実家に身を寄せていたのである。実家は全焼したが、家族全員無事であったことは不幸中の幸いであった。母の背でねんねこにすっぽり覆われて逃げ惑った時の、無気味な爆音と息苦しさと激しい揺れをないまぜた不快な感覚が私の古い記憶の奥底に眠っているようで、それが時々呼び覚まされるのか、小学生の頃まで似たような悪夢にうなされた。乳飲み子が覚えているはずがない、母から何度となく聞かされたからそんな錯覚が生じるのでは。しかし、近年、胎児の記憶についてのテレビ放送を見て、零歳時の記憶があってもいいはずだと思うようになった。

丸岡にある父の実家にしばらく世話になった後、一家は尾山神社近くに借家住まいとなった。当時のことを母といろいろ話しあっているうちに、忘れていたことを思い出した。それは三歳のときのこと。大家が借家を売却したのでそこを追い出されることになった。食事の最中、買い主が突然やってきてすぐに出ていけとばかりに人の荷物をどんどん外に投げ出し始めたのである。

引っ越し先は、工専（現金沢大学工学部）の武道場で、別の一家と部屋を分けての生活となった。そこで弟が生まれた。翌年の夏だろうか、海水浴で青りんごを食べすぎたのがよくなかったのか、ひどく腹をこわし、太ももに大きな注射をうたれた。まさかそのときの医者の孫と結婚することになるとは。

五歳のときに練兵場跡の一角にあった長屋に移り住んだ。おやつが出るという家族の話しに乗せられて、天徳院の幼稚園に通うことになったが、ちっともそんな気配がなく、園の遊びもおもしろくなく、しかも帰宅途中にいじめっこが出没するため、一カ月で止めてしまった。

六歳のときに野田平和町の官舎に引っ越した。この建物は、現在の金沢大学付属高校のプールになっている場所にあった。戦後のどさくさに建てられた粗末な作りであったが、六畳二間、五畳半一間、三畳一間、台所、独立した玄関と便所と物置という構えに私たちは大喜びであった。私は大学に入るまでここに住み、中学一年のときには、付属高校と敷地を共有する、目と鼻の先の野田中に通った。野田中が城南中と分かれ、全生徒が現在地に通うようになったのは中学二年のときからである。

弟は平和町にあった若草幼稚園に入った。園児生活は楽しそうで、母も礼拝に出席することがあった。弟が卒園記念にもらった新約聖書を読んだのが、私と聖書の最初の出会いであったが、最初に長々と出てくる系図に面食らって、禄に読み通さなかったようだ。

中学二年になって演劇部に入った。練習中、窓から見える若草教会のことが話題になり、一年先輩の藤田さん（現東京大学教育学部助教授）に誘われるまま、同輩の鵜沢君といっしょに日曜学校に行き始めた。現若草教会の長谷川さんも藤田さんと同期の演劇部員だった。演劇部員というのは、登場人物のキャラクターについていろいろ議論するせいもあって、中学生にしてはませていたと思う。演劇部での人間論が日曜学校での話しと共通性があったので、日曜学校に行くこと自体には抵抗感はなかったが、お祈りをさせられる（？）のはどうも苦手であった。

高校に入ると、これまた藤田さんに誘われてハイスクールＹＭＣＡへ。高校二年（一九六二）の復活祭に森野善右衛門牧師から洗礼を授けられた。指針を与えられた船乗りのような気持ちであったが、その後何回と座礁、迷走を繰り返しながら今日に至っている。

長男が私の受洗時に近い年齢となり、何かと気掛かりなことが多い。また、ヴェトナム和平協定（一九七三）後に生まれた世代が入学してくるような現在、大学一般教育の在り方をめぐって大きな転換を迫られている昨今でもある。

（すなどり一二八号、一九九三）